

日本の医療風土への挑戦

明日の医者を育てる

宮城征四郎, 黒川 清 著

内潟安子(東京女子医科大学糖尿病センター教授)

2年前に発行された本であるが、本号の宮城征四郎先生の対談を読んでもっと先生のお考えを知りたいと思われる方々に、この本をぜひご紹介したいと思う。実はインタビューのときに筆者がぜひもっと知りたいと先生に希望したところ、ならばとこの本をいただいたというわけである。

新しい研修制度が発足し、動きはじめて、いろいろに感じるところがあると思う。制度や法律というものは得てしてそうであるが、逆に用いるとトンでもないことになる。臨床の現場では指導医よりも1年目の研修医が最も権利を主張しているキライもなくてはならないが、もともとのお考えをもう一度、復習していただきたい。

税金を使ってどの国も多くの医師を育ててきたことをもう一度、考えてみる。みんなが必要とする医師とはなんだろうか。

つい最近、30代の日本人がパリの有名な名門カフェのギャルソンになった。外人としても歴史上で初めてのことであるとか。給料はどうかというと、固定給はなく、自分でどれくらいお客さんを呼べるか、お客さんが自分を指名してくれるか、チップをどれくらいもらえるかで決まるという。自分がどの程度お客さんに喜んでもらっているか、どの程度必要とされているかがそのまま給料

にまでつながるわけだ。これはなにもギャルソンだけでない、国際的に活躍する野球やサッカーの選手とて同じことだろう。

さて、プロの医師とはなんだろうか。どんな医師になりたいと思って医学部に入学されたのだろうか。どんな医師になろうといま研修でがんばっておられるのだろうか。

日本の医療は曲がり角に来ていることは至るところで耳にすることである。これは何も日本に限ったことではなくて、アメリカの Harvard 大学の医学教育においても過去に何度も直面し、それに立ち向かってきたことはいろいろな本で紹介されてきている。

日本の医療のどこに問題があって、その根源は何か、それからどうやってほんとうに人間に役立つ医療を生みだしていけばいいのか。成熟した日本において、どうあればいいのかの多くの提言がなされている。情報化時代に入り、多くの情報や人物と混ざりあいながら peer review して、お互いを高めあうことをやっていかなければ、これからの医師は賞味期限がすぐ切れてしまうにちがいない。

宮城征四郎先生の、「あなた方にがんばらせるために教えているのでない、私はあなた方に社会に貢献してもらいたいと思って教えている。」という若い医師への言葉は身にしみる。はて、筆者はどのくらいこの気持ちを強くもっているだろうか。M

● B6 頁 355 2003 年

定価 2,520 円(本体 2,400 円+税 5%)

[ISBN 4-9980670-9-5] 医療文化社刊